

交流型[6次産業化] 事業開発計画& 営業戦略資料集

付録CD-ROM付

総合エニコム

【執筆】

もちつき ようすけ
望月 洋佑

(第1編)

野村アグリプランニング&アドバイザー株式会社 コンサルティング部 上級コンサルタント
1980年静岡県生まれ。2005年東京大学大学院教育学研究科修士課程修了、株野村総合研究
所入社。同社では主に教育分野、観光分野を中心とした調査・コンサルティングに従事。
2014年より野村アグリプランニング&アドバイザー(株)に出向し、現在は農林水産業の調
査・コンサルティングに携わっている。主な著書・論文に「パブリックサポートサービス
市場ナビゲーター」(共著、東洋経済新報社)、「『クレド』に基づく自治体の学校経営」
(NRIパブリックマネジメントレビュー vol.78) 等。

まつもと ゆずる
松本 謙

(第2編、第3編、第4編)

株式会社ファーマーズ・フォレスト(えにしトラベル) 代表取締役
中小企業診断士/6次産業化プランナー/作新学院大学客員教授/6次産業化プロデュー
サー レベル5/認定農業者

慶應義塾大学法学部卒、2007年(株)ファーマーズ・フォレスト創業設立。「交流型6次産業
化」拠点施設である「道の駅うつのみや ろまんちっく村」の運営をはじめ、農産物直売
やアンテナショップなどローカルブランドの地域商社として直営事業を幅広くかけてい
るほか、「えにしトラベル」(第二種旅行業登録)により着地型旅行事業やインバウンド事
業も本格的に展開。「地方創生ビジネスの教科書」(文藝春秋社)では、同社事業が地方創
生モデル事例としても紹介されている。また、研修講師や各委員など、日本全国のさまざ
まな地域での地域活性化プロデュース&コンサルに参画しながら、農業と食・地域資源の
総合プロデューサーとして幅広く活動中。

U R L <http://www.farmersforest.co.jp>

E-mail y.matsumoto@farmersforest.co.jp

交流型[6次産業化]
事業開発計画&営業戦略資料集

2016年1月5日

社

橋2-10-2 ぬ利彦ビル南館

事業化計画

交流型の事業化にあたっての
留意点

期にあるわが国の農業は、現在、各関係府
携による産業政策と地域政策の両輪での政
が図られている。その根幹をなす6次産業
の両輪の特色をもって、第2編では、
かという産業政策の見地から6次産業化
た。一方で、社会構造や環太平洋戦略的
協定（TPP）などの数多い外部環境要
踏まえて、人々が手を入れることで健全
てきたわが国特有の自然環境をはじめ、
や風習が育んだ特色ある地域性と里山の
そして朴訥で勤勉な人々が代々守り続け
今後においても持続可能にすべく推進
政策は、産業政策と同様に重きを置く
ている。

観点から、農業のもつ多面的機能、日
の推進、食育推進による自給率改善な
本の理解促進は、農業の地域政策の重
っている。以下に述べる「交流型6次
推進は、まさにその農業の地域政策の
略手法なのである。

とにマルシェや手づくり市などが企画運営する
地元のボランティア組織や街づくり団体、
（青年会議所）や商工会議所など経済団体が
それぞれ手弁当で運営する催事などが街なかに
生み出している。郊外地では、田んぼの代
期には泥んこパレーなどが行なわれ、田植え
や稲刈り・収穫体験、食育や婚活などさまざ
企画で人々を呼び込む努力が続けられている。

街づくりや村おこしの現場を訪れると、「うち
の町（村）には何もないから」という言葉を聞く
ことがある。しかしながら、その地域をよく見
てみると、あまり活用されていない立派な施設
や空き店舗などのハードが多く存在し、いきいき
と暮らす人々、匠の技術、生活の知恵、受け継が
れた風習や伝統といったコンテンツも多い。そし
て何より、そのご当地の人々の生活を見守ってき
た里山の風景や環境がある。

豊富な地域資源も、普段から見慣れているとこ
く当たり前になってしまい、その“潜在価値”に
気づかなくなることが多く、「何もない」から
「新しい何か」を探したくなってしまいうようであ
る。こうした多くの街づくりや村おこしの現場に
共通する課題として、地域の“潜在価値”を結び

ただ現在の地域におけるそのような「つなぎ
手」は、先述したようにボランティア団体や街づ
くり団体、経済団体といった、奉仕的な地域貢献
に支えられているのが実情であり、継続性という
視点において難を残している。地域経済の好循環
を生み出す仕組みづくりとは、継続性を大前提と
しているため、奉仕的地域貢献に基づいた基盤で
はなく、地域内の利益還流による自立自走の地域
経済を描いている。

そうしたなか、人口減少社会を踏まえた街づく
りとして、わが国でも各地で「コンパクトシ
ティ構想」が議論されはじめた。コンパクトシ
ティ構想とは、社会的インフラを小さい範囲で整備し
て、わが国が迎える超高齢化の縮退社会におけ
る基本的な街づくりの考え方となっているよう
である。コンパクトシティの核となる重要度の高
いインフラは、主に行政施設や病院、金融機関や
郵便局などの公共施設であるが、「道の駅」など
をはじめとした地域経済の利益還流を生み出す商

流の拠点施設も必要不可欠の中核施設である。
しかしながら、コンパクトシティ構想で小さな
街（村）づくりを目指したとしても、施設整備だ
けでは利益還流は起こせない。来訪者に地元の食
材を食べたり買ったりしてもらい、生産者とふれ
あい、地元のエピソードを知ること、ご当地の
ファンになって再来訪する仕組みをつくってこ
る。消費の促進が図られ、外貨を地域で還流



「交流型6次産業化」は地域経済の好循環を生み出す仕組み
づくりとしての「地域経営」そのものである。

べきものは、地域経済の好循環を生み出す仕
組みづくりとされる「地域経営」そのものである。

(3) “地域総合プロデュース”の視点

そうした「地域経営」を目指すためには、“地
域総合プロデュース”の視点が欠かせない。農山
漁村をはじめとした地域活性化において、「三
（ヨソ者、馬鹿者、若者）の視点」が取り上げ
れるが、これには、「ヨソ者」のように地
域に対して冷静な視点でみられ、しがらみ
ない発想を可能とすること、「馬鹿者」
のように常識にとらわれない発想
と、そして「若者」のように機
という理に叶った理屈がある。

例にとる理屈は、そのまま
“ス”の視点に当てはまる
よく誤解されるが、
齢化や耕作放棄地の増
ない。確かにそれ
で抽出され、長
違いないが、
はまったく
い間に染
れてき